

第IV部門 京における路地空間の把握

大阪工業大学工学部 学生員 ○高岡光太朗
 大阪工業大学工学部 飯田 大介
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞
 大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成

1. はじめに

近年京都では、定番コースの社寺観光だけでなく、伝統的な京町家を散策する「まちなか観光」が脚光を浴びている。京都の市街地では、大路小路で形成される街区の間を通り抜けるように車が通れない街路が数多くあり、これを路地と書いて「ろーじ」と呼んでいる。路地ができた形成過程は平安京の町割が序々に変化して形成されてきており、平安時代末期頃に人びとは暮らしの利便性やコミュニティ形成のために作られてきた(図-1)。現在、ほとんどの路地が明治期から形成されたものであり、石畳などの特徴をもつ京の路地空間は、今も多くの目から注目されてきている。そこで本研究では、石畳などによって路地らしさを感じられる特徴を多くもつ京の路地空間に着目した。

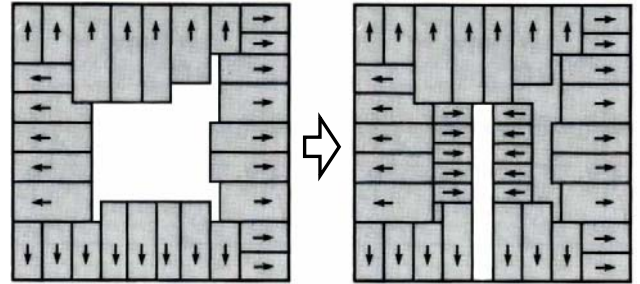


図-1 路地の形成過程(平安時代末期)

2. 研究の目的と方法

近年路地では、歴史・文化を色濃く残す存在として見い出されるとともに、現状の問題点として、路地の防災性の欠如などが懸念されている。おもに幅員4m未満の路地は消防車などが通れないため、防災面・安全面の機能をもたせるために道を広げることが最も効果的であると考えられるが、それでは路地らしさを失われてしまう可能性があるため、路地らしさを維持しながら問題点を改善することが重要である。そこで、京都の路地空間にある路地らしさを定量化することを本研究の目的とする。研究の方法として、平安京が昔位置していた京都の中心市街地となっている上京区、中京区、下京区、東山区の4区を対象地とする。路地らしい路地を取り上げる場合、典型的な路地を抽出できると考えた。そこで、路地の定義を調べ、それにもとづく路地空間を地理情報システム(GIS: Geographic Information System)上に基盤地図情報と住宅地図を用いて抽出する。抽出した路地を対象に現地調査より路地空間の要素と構成を把握している。くわえて、路地空間をモデリングシミュレーションによって把握した路地らしさを表現している。

3. 路地(ろーじ)の定義

京都の路地は、L字型、T字型、卍型、鉤型など、さまざまな街路形状をもっている。またそれらの構造によって独特の呼び方があり、町通りの間をつなぐ突き抜けの路地を「図子・辻子(づし)」, 行き止まりの袋路地は路地(ろーじ)などと呼ばれている(図-2)。しかし、それらは慣習的な呼び名あり、路地には明確な定義が存在しないため、本研究では路地の定義を「①幅員が4m未満であること。②通りに対して路地が直角であること。③通り抜けできる(図子), できない(袋路地)は関係なく、全てが対象。」とした。

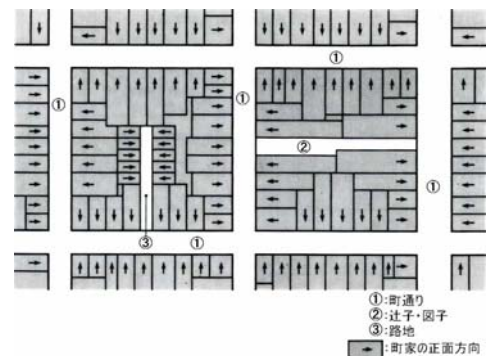


図-2 京の「路」の模式図

Kotaro TAKAOKA, Daisuke IIDA, Shin YOSHIKAWA and Kazunari TANAKA
 rotaryturbo@hotmail.com

4. 調査地選定方法と結果

前章の定義にもとづいた路地空間がどこあるかを把握するために、GISを用いる。京都にはDM (Digital Map) データがないため、国土地理院の基盤地図情報を用いることとした。しかし、基盤地図情報では前章の定義にある4m未満の街路は表記されていないため、4m未満の街路が表記されているゼンリンの住宅地図を用いることとした(図-3)。



図-3 基盤地図情報と住宅地図の街路表記

調査対象地とする上京区、中京区、下京区、東山区の全てを網羅して詳細な調査を行うことは現実的ではない。このため、各町内の路地数の多い地域に着目した。路地数が多い地域は、さまざまな路地空間が存在しており、多くのサンプルを得ることができると考えたためである。これにより本研究の目的である路地空間の路地らしさを把握するのに役立つと考えた。詳細に調査する調査地を選定するにあたり、路地数以外に「路地の全長」も重要であると考えた。理由として、長ければさまざまな特徴が多く含まれると考えられるためである。ここで基盤地図情報に記載されておらず、ゼンリンに記載されている道を路地と仮定し、GIS上に定位して路地の分布状況を調べた。分布状況から調査する町を表-1の下部に記されている14の町に選定した。選定後、各町の路地空間の特徴を把握するために、現地調査ではビデオカメラを用いて路地の細部まで撮影した。その結果、「自転車」「町家」「石畳」「照明」「町家路地(町家の下を通り抜ける路地)」など10の特徴を抽出でき、このなかで「石畳」「照明」を路地らしさの要素と考えた。理由として、路地について記載されている「路地からのまちづくり」では、京都の路地の路地らしさとして石畳や灯籠といった特徴を取りあげているためである。この「石畳」と「照明」をもつ町がどこであるか、14の町の中から調べた結果、中京区の「下樵木町」が比較的高い割合を占める結果となった(表-1, 表-2)。

表-1 石畳の割合

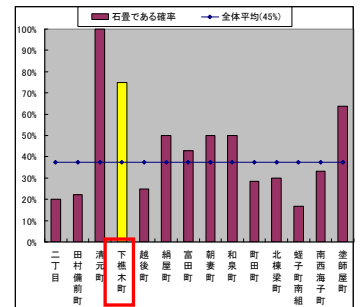
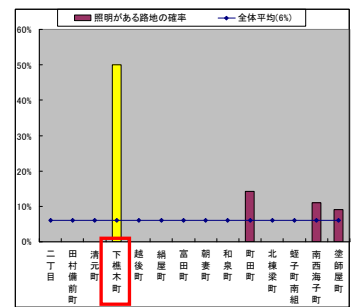


表-2 照明の割合



5. モデリングによる魅力の把握

前章で明らかとなった下樵木町の路地を参考にし、路地らしさと考えた二つの要素の有無によって、路地空間がどのように変化するか、路地空間のシミュレーションを行った。これにより、要素を追加し照明を灯すことで主観的ではあるが、路地の魅力が変化したと感ずる結果となった(図-4, 図-5)。



図-4 シミュレーション1

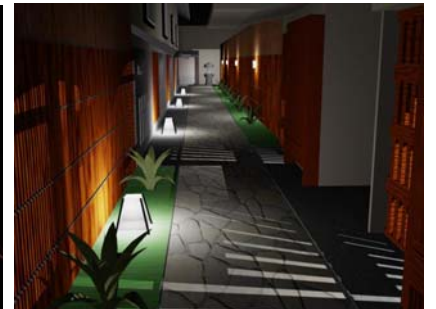


図-5 シミュレーション2

6. おわりに

GIS上で京都の路地の分布状況を把握することで、路地数や特徴の抽出することにより、多くの路地が集積する町を把握することができた。抽出した路地の中から、路地らしさを表現する二つの要素を把握し、モデリングによる表現を試みたが、現段階では主観の域で留まっている。今回は路地らしさについて着目したが、京都の魅力には京町家もかかすことはできず、今後は京町家についても考慮するとともに、路地らしさの要素を明確化し、新たな路地らしさの要素を発見することを目指したい。

【参考文献】川崎清, 小林正美, 大森正夫: 仕組まれた意匠, 鹿島出版会, 1991